

抄 録

○手掌に於ける淋巴腺の一例。 Eugen Davida, Ein Fall von einem Lymphknoten an der Hohlhand
(Anatomischer Anzeiger. 58 Band, S. 397, 1924.)

著者は偶然 68 歳の男子の右手掌を剖検し拇指球に於て表在性の淋巴腺を発見せり。

淋巴腺の位置。 拇指球の内側にして短屈拇筋の中央内側斜面に位し其深さは皮膚直下にして拇指球を被へる掌筋膜の上に存す。

大き及び形状。 一側の少しく陥凹せる完全なる豌豆状の結節にして其長軸に於て 8 mm, 幅 4 mm を算す。

領域。 此の淋巴腺に出入せる淋巴管は幽微にして淋巴管が小なる爲只短距離に追及し得るのみ, 此等の淋巴管は拇指及び示指より來り拇指球を上方 (Proximalwärts) に走る。

對照。 同人の左手掌を検せしも斯る淋巴腺の痕跡も發見し得ず。

既往の業績。 著者が調査せし Literatur に於ては手掌に於て淋巴腺の發見されたるは絶無なり, 1909 年迄に認められたる凡ての淋巴腺の異常に關する Bartels の著書中に於ても手掌淋巴腺の記載無し, 又最近の Literatur に於ても手掌淋巴腺に類似の淋巴腺或は一般に手掌に於ける淋巴腺に關する報告は絶無なり, 只之迄に上肢に於て報告されたる淋巴腺は Morgagni 及び後に Frohse に依て各々 1 例宛前膊の掌面に於て發見されたる前膊淋巴腺があるのみ。(解剖, 佐藤抄)

○靜脈竇と左腔靜脈との關係。 Viktor Papilian und papa Rubin cluj Klausenburg, Der Zusammenhang des Sinus venosus mit der Vena cava sinistra. (Anatomischer Anzeiger. 57 Bd, S. 276, 1923-1924.)

靜脈竇と左腔靜脈とが連続せる例は左程多く存するものにあらずして著者は痙攣管にて死せる小兒に就て斯る例を報告せり。

心臓の後面に於て心室の上部にて左心房の下半部の後に當りて心内腔を極めて鮮に分離せる Korridor が存在す。此の Korridor は左側は左腔靜脈迄延長し右側は下腔靜脈迄延長す, 而して Korridor は上下の方向に 3 cm, 横の方向に 5 cm を算す。此の靜脈竇を縦斷すれば二つの壁を認む, 一は左心房を區別する厚き前壁, 一は此の左心房の上壁が延長してなせる後壁とす。此の二つの隆起は左は直接左上腔靜脈に續き, 右は下腔靜脈に續く。而して右上腔靜脈は右心房の上壁に開口す。

心臓腔内の検査。 心室, 靜脈口, 房中隔等皆正常の發育を示し異なる所なし, 只此に注意す可きは Valvulae Thebesii und Enstachi が甚だ小なる事及び Limbus fossae ovalis Viensinii が幽微となれる事なり。此の異常の外に向ほ一つの必要なる異常存在せり, 即ち左上腔靜脈は大動脈弓の前側で正中線の左側を下り心臓に達し靜脈竇の左隆起に連續す, 此の左上腔靜脈に一の靜脈開口す, 其は大動脈より左で脊柱の左側に沿ひ上行せる靜脈にして此は左心靜脈に相當するものなり。此の靜脈は心臓と同じ高さに達し弓形をなし大動脈弓及び肺根部を廻りて左上腔靜脈に開口す。

著者は此の異常が持續するも生命に差支へなきも此の小兒は 3 歳にして死せり。と報告せり。

實際に於て靜脈血は左腔靜脈及び左心臓靜脈から靜脈竇に依て左心房に導かれ、所で右上腔靜脈から注がれた血液と合流す。此の異常の胎生學的の説明は批判する迄もなく明瞭なるも尙ほ困難なるは其交互關係及び其連絡を決定する事なり。著者は此點に關し恐らく左上腔靜脈の延長及び其媒介による循環の成立に依り此の靜脈竇が胎生的の性質を以て延長する原因ならんを想像せり。(解剖、佐藤抄)

○心筋斷裂の成立期に就きて。 S. Saltykow, Über die Entstehung der Myocardfragmentation. (Ziegler's Beiträge zur pathol. Anatomie und zur allg. Pathologie. Band 73, Heft 3, 1925.)

心筋斷裂なる現象は總て死戰期に於ける產物なりとは、現今一般に信ぜらるる見解なり。然るに著者は普通變形桿菌(Bacillus proteus vulgaris)による亞慢性中毒にて死去せる屍體に於て、心筋の高度なる斷裂を認め、且斷裂片の間に炎性新生結締織の侵入あり、斷裂せる筋片の或るものは變性に陥り、又或るものは肥大せるを見たり。即ち本例は亞慢性斷裂性心筋炎と稱すべきなり。尙ほ急性汎發性心筋炎の1例に於ても亦著しき炎性細胞浸潤を伴ふ心筋斷裂を認めたり。

此等の事實に基き心筋斷裂は死戰期のみならず、尙ほ生前に於きてもよく成立し得べきことを主張す。

(病理、田部抄)

○死後喰細胞作用に就きて。 Willi Siemens, Postmortale Phagocytose. (Ziegler's Beiträge zur pathol. Anatomie und zur allg. Pathologie. Band 73, Heft 3, 1925.)

著者は解剖屍體の鼻甲介粘膜に葡萄狀球菌、驚口瘡菌及び墨汁を注入して白血球の喰細胞作用を検したり。血管中の白血球は全身死の後久しく喰細胞作用を保持するものにして死後68時間迄尙ほ之を認むるを得たり。白血球の喰細胞作用は死後24時間以内にありては比較的強盛なるも、死後50—60時間にては減退す。葡萄狀球菌は注入後急速に喰喰せらるるも、驚口瘡菌は攝取せらるるこゝ之に比して緩徐なり。驚口瘡菌に對する喰細胞作用は葡萄狀球菌及び墨汁に對するより早く減退す。(病理、田部抄)

○甲状腺摘出後結果の知見補遺。 Emil Abderhalden, Beitrag zur Kenntnis der Folgen der Schilddrüsenexstirpation. (Pflüger's Archiv für die gesammte Physiologie. 208. Bd. 3/4 Heft.)

著者は甲状腺摘出後の身體的變化に對し次の疑問を興へ且これに答へたり。

1. 甲状腺摘出「モルモット」は其の生殖力に如何なる關係あるか。
2. 其の子孫の數及び健康状態は如何。
3. 甲状腺摘出後時の経過と共に其の一般及び瓦斯新陳代謝は如何に變化するか。
4. 障碍せられたる體温調節機能は後來再び回復せらるべきや。
5. 甲状腺摘出動物の「メチール」基侵入作用は如何。
6. 甲状腺以外の内分腺に對する關係。
7. 個體的差別は存在するか。
8. 甲状腺摘出後一見全ての症候が回復せしもの如く見ゆるものに於て尙ほ格段なる症候を確定し得べきや即ち甲状腺の脱落後再び動物體內一般細胞機能の完全なる平均を保ち得るや或は常に脱落症候を遺存するものなるか。

生殖能力は明に減退す、吾實驗に於て6疋の正常「モルモット」は1年間に16疋の子を儲けしに6疋の無甲状腺「モルモット」は唯9疋を擧げたり、且其の内2疋の死産と2疋の生存不能の早産ありき、然れども比較的幼時に手術せしものは成績よく3疋の「モルモット」より8疋を生じ2疋の死産の外健康なりき、且乳汁分泌の減退と早期の停止とを認めたり。

窒素新陳代謝に関しては手術後4週間までは非常に著しく減退せしもそれより漸次回復して正常に近き、4乃至6箇月に至れば正常に復す、然れども個體的の差別の存するものにして或者は症状重くして2乃至8週間に於て死し他は1年以上も緩慢なる新陳代謝を持続するあり、瓦斯新陳代謝も減退するも又一般に3乃至6箇月後には再び正常に歸る勿論この場合にも個體的差別によりて緩急種々なり。

體溫調節機能に関しては正常動物に比し全く異なる状態を取るものにして無甲状腺動物は1或は2度の冷所に於ては急に體溫は降下し次で徐々に常溫に返る、この症状も時の経過と共に變化するものにして2,3箇月の後には不明瞭なる、但し2例に於ては手術後16箇月を經て一見何等の症状を呈せざる時尚ほ著明なる調節障害を表はせるものありき。

甲状腺摘出動物は「テルル」酸に對して鋭敏にして正常動物に何等の障碍なき分量の非經口的投與によりて死するか或は深き昏迷の後回復す、これ「メチール、テルル」の形成の緩徐又は減弱に基因するなり。

無甲状腺動物の毛髪は正常に比し殊に脆弱なり。

吾實驗に於て甲状腺摘出後85%に於て殘留せる上皮小體の肥大を、60%に於て腦下垂體の肥大を、25%に於て脾臟の縮小を、大多數に於て副腎の肥大を、平均的に生殖腺の縮小を實見せり。(生理、高橋抄)

○分離したる甲状腺物質の生理的性質につきて。 G. A. Maloff, Über die Physiologischen Eigenschaften der Substanzen der isolierten Schilddrüse. (Pflüger's Archiv für die gesammte Physiologie. 208. Bd. 3/4 Heft.)

1. 分離したる甲状腺の血管に對する毒素の作用。

犬に於て甲状腺を分離して上甲状腺動脈より入りて下甲状腺靜脈に出る リッゲルロツク 氏液を以てせる灌流試験に於て「アドレナリン」は常に甲状腺内の血管を縮小せしめ、「ニコチン」は其の強濃度に於ては同じく縮小せしめ、「コフエイン」はこれを擴張せしむ、又「クロールバリウム」は液の流出量を減じ「ロニン」は又血管を擴張せしむ。

2. 甲状腺内灌流液の他の分離せる臓器に對する作用。

分離したる牛の甲状腺内を灌流せる リッゲルロツク 氏液は分離せし家兎の耳の血管に對し收縮的に作用す、而してこの作用は甲状腺灌流の最初の液のみならず装置後4時間に取りと灌流液にても起る、又この液は蛙の分離肝臟、四肢及び心臓に對しては直接一定の影響を與へざるも間接にはこれ等の臓器に對する「アドレナリン」の作用を助長せしむ、蛙の肝臟血管に對する「アドレナリン」の作用は初めはそれを擴張せしめ次で縮小せしむるものなるが甲状腺灌流液はその二つの場合何れにも助長的に作用す、而してこの作用も亦灌流當初のみならず實に装置後4乃至6時間後の液中にも存す。(生理、高橋抄)

○神經の比較的興奮不能期に於ける衝動の傳導狀態。 Gasser & Erlanger, The Nature of Conduction of an Impulse in the relatively refractory period. (The amer. Journal of Physiology. Vol. 73. No. 3.)

Braun tube を用る神經の動作電流を標準として神經の比較的興奮不能期に於ける衝動の傳導狀態を蛙の坐骨神經(室溫)並びに犬の横隔膜神經(37°C)に於て研究せしに兩者は甚だ類似せるものにして

1) Gotch 及び Lucas の見る所と同じく神經の比較的興奮不能期に發生せし反應は遲延するものにして夫は二刺戟間隔の短かきほど、又傳導距離の大なるほど著明なり。

2) 傳導最初の數種は遅延最大なるも 12 種位までは追求し得たり。作圖上では尙ほ長く持續するものなる事を示す。

3) 刺戟として短かき感應電流刺戟を用ゐるゝ比較的興奮不能期に起る反應は正常反應同様に刺戟後直ちに陰極導子の部に起りその時間的關係は正常と同じきも動作電流強度は小さし。

4) 青蛙の坐骨神經に就きての實驗では興奮は遅延なしに出發せる事を示せり。

5) 之等の觀察から比較的興奮不能期に起りし反應の遅延するのは全然傳導速度の減退せるに因す即ち Gotch の説に左袒するものなり。

6) 遅延と傳導距離に關して實驗的に簡單なる指數曲線を得、之より速度を算出し、傳導距離と速度とに就きて作圖する事を得、それに依れば速度は初めの 10 cm 以内に殆ど正常値に近づくものなり。而して尙ほ遅延の結果次の神經の部はより irritable 従つて速度は早くなるを以て遅延は傳導單位距離につきは漸減的に小さなる。

7) 比較的興奮不能期の神經の反應の上行期は常に同部の正常反應の夫れよりも長し。正常にても上行期は傳導と共に長くなるものなるも反覆反應せば益々甚しく最後の波の頂點は出發後段々々々後れ行く。

8) 比較的興奮不能期の早期に刺戟が與へられるとその反應は小さく傳導と共に大きくなる、若し後期ならば反應大にして傳導と共に小くなり或は初め小くなり後大なる。此の増加は反應が比較的興奮不能の神經より發する時箇々の神經纖維は傳導と共に(5)と同様理由でより大なる反應を發するに由るものにして又反應の減じたり反應時間の長くなるのは正常波の形を減じさすと同原因に由るものなりと説明する事を得。

9) 上記遅延の形式は第一第二兩刺戟が神經の異なる二部に與へらるゝきも同じき部に與へらるゝきも Lucas の言の如く同様で反應は傳導中に同様に變化を蒙るものなり。

10) β 波も比較的興奮不能神經部では遅延し、その度は α 波より著し。(生理、林抄)

○紅斑性狼瘡の「クリゾルガン」療法に就て。 Heise, Beitrag zur Krysolganbehandlung des Lupus erythematosus. (Dermat. Wochenschr. Bd. 80, Nr. 26, 1925.)

結核の金療法は既に古くより考へられたる事にして之を發表せるは Feldt 氏 (1913 年) を以て嚆矢とす。尙ほ同氏は「クリゾルガン」をも其の治療に用ひたり。

紅斑性狼瘡が今日最早結核と無關係の疾患とせらるるも「クリゾルガン」を屢々其治療の目的に試みられたり。此疾患に對して「クリゾルガン」の治療成績を初めて公にせるは Martenstein 氏なり。爾來多くの治験報告あるも其價値に就きては一定せず。

「クリゾルガン」の作用は尙ほ不明にして Ullmann 及び Levy 氏何れも直接細菌を死滅せしむるにあらずして其組織を破潰し關接に滅菌と考ふ。細菌多くして組織に乏しきもの、例へば尋常性狼瘡、肺結核等は影響を蒙らざるも細菌少くして組織に富める皮膚結核並に結核疹には有效なるが如し。故に「クリゾルガン」の作用は間接に組織に作用するものにして之に二種ありと考へらる。

1) 特效薬として特殊の肉芽組織に適す。 2) 抗体を作るべき重金屬鹽として作用す。且此のものにも他の重金屬鹽と同じく毒性を有す。

「クリゾルガン」に依り副作用として Martenstein 氏は種々の中毒性發疹、口内炎、胃腸「カタル」、四肢痛、四肢の浮腫、腎臟炎、後發性黃疸等を擧ぐ。其他二三死亡例の報告あり。其死亡せるものに於ては解剖の際顔面、

喉頭及び縦隔膜内組織の急性浮腫並に萎縮腎に併發せる急性腎臟炎を證明せり。是は「クリゾルガン」に對する特異質をも解するを得べし。「クリゾルガン」の注射前毎回精密なる尿並に「エオジン」嗜好細胞の検査の外治療中皮膚、粘膜をよく觀察し、口腔、齒牙の衛生に注意すべき事は豫防策として必要なり。

注射量は各人に依りて異なるも 0.05—0.1 cc を推奨するあり、0.01—0.02 を最初の量とするあり、「サリチル」酸水銀の筋肉内注射を併用するは効果なし。注射の間隔は 8—10—14 日とす。著者の經驗にては局所反應は注射後 24—48 時間に起りたるも全身反應は唯だ例外的に見たるのみ。而も重篤なる症狀或は死亡例には遭遇せず。尙ほ屢々大量より初めて後少量を使用して良好なる結果を収めたり。

治療成績に就きては餘り良好ならざりき。即ち著者の見解に依れば「クリゾルガン」は必ずしも常に確實に作用する治療薬にあらず。

結論として、「クリゾルガン」は絶対に信するに足るべきものにあらず、又時に副作用を來す。尙ほ大量にして無效の場合却つて少量を用ひて相當の効果を収めたり。

特に強度の異常角化を示せるものは治療困難なり。「クリゾルガン」を在來の療法と併用するは推奨するに足る。(皮泌、内田抄)

○紅斑性狼瘡に就て。 Binford Throne, Lupus erythematosus. (Archives of Dermat. & Syphil. Vol. 12, No. 1, 1925)

著者は本症の原因的關係に對する文獻を略述したるが其内 Barber 氏が本症と連鎖狀球菌との關係を見てその「ソクテン」にて効果ありと説けるに就てその追試を行ひたり。即ち内科的に完全なる検査を行へる患者に就き、鼻、咽喉、齒牙等はそれぞれの専門家に検査せしめたり。尙ほ W. R. 及び結核に對する補體結合反應或は結核に對する皮膚反應試験並に培養等を試みたり。

結核に基く疾患として 7 人の尋常性狼瘡患者に就きこのうち 5 人に對し前記の諸法を行ひたるも 4 人は陰性、1 人は兩側肺炎の變化を示したり。W. R. は凡て (-), 結核の補體結合試験は 1 人陽性のみ。而して結核菌培養による疾患として 11 人の結核疹患者は W. R. 全部陰性にして、結核補體結合反應に對しては 10 人に於て陽性を示せり。尙ほこの反應は 18 歳の皮膚腺病の少女及び右肺に變化を有せる Boeck 氏類肉腫の患者に陽性なりき。即ち尋常性狼瘡に於ては結核に對する補體結合反應は只 1 例に於てのみ陽性に反應し 14.28% の陽性率なり。この事實は陰性反應を示す場合は大體外的傳染のものにして、皮膚結核の毒力は大なるものに非ず、且皮膚より吸收さるる毒素の量は極めて僅微なるため補體結合反應に必要な物質を増加せしむるに足らざるものをも看るを得べきか。

結核疹に對する補體結合反應は 90.9% にして前述の少女の場合を合すれば 91.66% の陽性を示す。紅斑性狼瘡に關しては 38 人の患者を用ひたり。彼等の病竈は頭部及び顔面にありき、舊「ツベルクリン」の皮内注射を行ひたるも 1 例を除く外は種々の程度の陽性を示せり。併し、本反應陽性の場合には非働性の結核を示すも考へられたり。6 人の患者に就て皮膚切片の動物接種試験を行ひたるも凡て陰性に終り。

結核の補體結合反應は 30 人の紅斑性狼瘡患者に行ひしが唯 4 人が陽性なりき。此 4 例は肺或は頸部淋巴腺炎に罹患せるものなりき。原發竈と思はるべきものは 26 人の患者中 24 人が齒牙、扁桃腺、上顎竇等の疾患を有せり。數例の培養試験にて連鎖狀及び葡萄狀球菌を示せるものあり。

原發竈と思はるる疾患除去の結果は紅斑性狼瘡の初期に於ては多少の好影響を與へしも病竈に萎縮の起れるも

のには原發菌除去も何等の效果なし。又培養陽性なりし球菌の「ワクチン」にて治療せるも效果を見ざりき。

本症の治療に關して凡ての方法を用ひたるも「ラザウム」及び雪狀炭酸以外のものは全部無効に終れり。「ラザウム」は少くも2紅斑量を使用し2mmの「ゴム」を0.1mmの眞鍮にて濾過するを適當とす。雪狀炭酸は「ラザウム」の代用品として應用し得べく病竈面に應じ強壓のもさに1—2分間貼用すべし。(皮泌, 藤原抄)

○淋菌性尿道狹窄の一新治療につきて。 Marselos, Eine neue Therapie gonorrhöischer Harnröhrenstrikturen. (Zschr. f. Urol. Bd. 19, N. 6, 1925.)

「ゲアアルミー」が、纖維溶解作用を有する事は、衆知の事實なり。著者は之を淋疾竝にその合併症たる攝護腺炎及び副睪丸炎、更に淋菌性尿道狹窄に應用して本法には纖維溶解力と共に、狹窄に對する擴張力ある事を認めたり。今之を「ゲアアルミー」擴張法と命名す。本法には、前尿道用、後尿道用の Nr. 1—20 の「カテーテル」あり、而して使用に際しては、「ゲアアルミー」の一極を「カテーテル」に、他の極は、四つに分つて、それぞれ陰莖、腹壁、會陰及び脊柱と連結す。電流の強さ 900—2600「ミリアンペア」、溫度 42.0°—44.5°, 持續時間 20'—25' なり。全例 16 例、何れも高度の狹窄患者なりしが、幸に本法にて良好なる成績を見たり、即ち本法には次の利益あり。1) 非觀血的なる事。2) 凡ての狹窄のみならず、毛様狹窄にも應用し得る事。3) 患者の疼痛を速に緩解し得る事。4) 擴張の結果は割合に持續的なる事。5) 狹窄療法中、他の淋疾治療も行ひ得て、而も合併症を、豫防し得る事等なり。(皮泌, 大道抄)